

水平線のムコウ ～Over the Horizon～

元領事のつれづれ話

栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人

(第10回：2020年7月)

オリンピックの開催 (アテネでの経験から その3)

今回と次回は、アテネオリンピック開催直前に機運が盛り上がった背景、閉幕後現在に至るまでの状況を振り返り、アテネオリンピック・パラリンピックのレガシーとは何だったのか考察してみたいと思います。

幸運の女神？

オリンピック開催を目前にしていた時期でさえ、ギリシャ国民の盛り上がりという点では今一つでした。特に、オリンピック大会前にギリシャの金メダル候補の陸上選手2名がドーピング検査を拒否して出場資格を失うことになるという、開催に水を差すような事件が発生したことで、なおさら沈滞ムードが漂っていました。このよどんだ空気を一気に変え、オリンピックを最高の雰囲気で見ることができたのは、開催1カ月前の7月に開催されたサッカー・ヨーロッパ選手権（UEFA EURO 2004）決勝で、ギリシャが下馬評に反して開催国のポルトガルを撃破し、チームを史上初優勝に導いたことです。ギリシャの国民的スポーツであるサッカーで、自国代表チームが華々しい勝利をおさめ首都に凱旋したことは、国民を大いに勇気づけ、開催を直前に控えたオリンピックの歓迎ムードを最高潮に盛り上げたといってもいいでしょう。優勝から数日間、アテネは毎晩がお祭り騒ぎでした。ヨーロッパでは、ヨーロッパ選手権の優勝はワールドカップでの優勝に匹敵するぐらいの価値を認められていたので、まさに起死回生の一撃だったといえます。スポーツ、特にサッカーが国民を一つにまとめる力の凄さをまざまざと見せつけられた思いでした。さすが神話の国ギリシャ、勝利の女神ニケ（スポーツ用具メーカー・ナイキ（NIKE）社の社名の由来としても有名）、戦いの女神アテナ、幸運の女神テュケなど、多くの神々がギリシャチームの勝利を後押ししたのかもしれませんが。

オリンピック本番

アテネ大会は、直前の盛り上がりを持続したまま開会式を迎えました。開会式の模様や個々の競技結果については、読者の皆さんの方が詳しいと思いますので割愛しますが、大会期間中に気付いたことに触れます。



オリンピック・コンプレックスにて

開催国ギリシャは大活躍で第1回アテネ大会以来のメダル数を獲得、ついでにわが日本も過去最高のメダル数を獲得しましたが、成績だけを見れば大成功だったといえるでしょう。その後に行われたパラリンピックも、オリンピックと同じ競技施設を使用して144カ国という多数の国が参加、8月のオリンピックから9月のパラリンピックまで、懸念されていたテロなども起きることなく、平

穩裡に終了しました。大会期間中、オリ・パラそれぞれでいくつか競技を観戦できたことは、筆者にとっても貴重な体験となりました。ただ、開会式こそ超満員の熱気にあふれていましたが、その後行われた多くの競技では観客席にかなりの空席が目立ったことが気になりました。全ての競技で満席にすることは難しかったにせよ、ギリシャではあまりポピュラーでない競技が数々あり、また観戦チケットが高額だったこともあってか、ギリシャ人の観客は少なかったように思います。観客席では一般客よりも競技関係者や出場選手の親族、出場選手を応援する自国選手団等の姿ばかりが目立っていたのが印象的でした。右の写真は、競泳会場の様子（写っているのは筆者長女）ですが、この会場は当初は屋根のある会場の予定だったものが、建設スケジュールの遅れから、急遽、屋根なしに設計変更されたものです。ここも空席が目立っていました。



競泳会場にて

膨大な建設コスト

前々回にも触れたように、アテネ大会の運営は、競技施設のほとんどが新設、メインスタジアムこそ改築工事でしたが、施設工事には巨額の資金が投じられたといわれています。この時期、ギリシャはオリンピック特需によって年6%に迫る高い経済成長を見せています。しかし、そのコストの大部分がEUからの補助金や国債の発行、要は借金によって賄われたわけで、この莫大な投資が果たして国力に見合ったものであったのか、あるいは競技施設の大会後の利活用まで考えての投資だったのかといえば、大いに疑問が残るところです。特に、オリンピックでは多数の競技種目がありますが、そのうちギリシャで日常的に国民になじみのあるスポーツがどれほどあったのかを考えると、競技会場を恒久施設とするか仮設にするか、仮設にした場合の解体後の跡地利用などについて十分な詰めが行われないうまま、初めから開催ありきでまっしぐらに突っ込んでいった印象です。

大会後のソフトボール会場の惨状

例えば、野球、ソフトボールはアテネ大会の競技種目で、プロ野球選手で構成された野球日本代表チーム、女子のソフトボール日本代表チームともに銅メダルを獲得した

けですが、ギリシャもそれぞれ開催国枠で参加していました。しかし、筆者は3年半の在勤中、野球やソフトボールをプレーしているギリシャ人を見たことは一度もありません。競技のルールを知っているギリシャ人も少数だったと思います。そのような競技で、国内の何処に選手がいるのかと思ったら、野球は登録選手のほぼ全員が外国籍（主にアメリカ）との二重国籍者で、メジャーまたはマイナーリーグ経験者でした。ソフトボールの選手も、ギリシャ生まれのギリシャ人は少なかったと思います。ギリシャ国内では、両競技とも全くのマイナーなスポーツだったのですが、正式種目である以上、国際オリンピック委員会（IOC）のルールに基づく適正な規格と観客席を有するそれぞれ専用の競技場が必要でしたので、出場8カ国、僅か32試合のために、多額の建設資金を投じて2つの競技場が建設されたわけで、非常に贅沢な施設だったことになります。

後日談になりますが、アテネには在留邦人の親睦団体として日本人会があり、毎年ソフトボール大会を催していました。2005年のソフトボール大会では、会員からオリンピック会場でやってみたいという要望が多く寄せられたので、施設を管理しているアテネ市当局に当たったところ、有料で借用することができました。これにより、アテネ日本人会員は女子日本代表もプレーしたオリンピック競技場でプレーするという思い出を残すことができたのですが、会場借用に当たってアテネ市の担当者より、「オリンピック後は誰も使用しておらず、全くメンテナンスを行っていないので、借りる側で清掃してほしい」との条件が付きまして。掃除ぐらいいは仕方がないかと現場に赴いてみると、グラウンドは一面雑草が生い茂る原野の様相で目を覆わんばかりの惨状。500ユーロもの借料を払った上に、10人ほどで3時間以上かけて大量の雑草を抜き整地をするという作業までさせられました。競技場は、まさしく「兵どもが夢の跡」だったわけです。その後、このソフトボール競技場は荒れ放題のまま放置されているとのことでした。

ちなみに、野球会場は2007年当時に改修が行われ、一時は地元のプロサッカーチームのホームスタジアムとして使用されていたようですが、現在はシリアやアフガニスタンなどから欧州に向けて逃れてきた避難民の滞在キャンプになっているようです。

つづく

（公財）栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人（略歴）
1977年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モントリオール総領事館、在連合王国（英国）大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の9公館で計29年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に2019年3月退官。同年5月より現職。